
G

こむぎ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G

【Nコード】

N5890D

【作者名】

こむぎ

【あらすじ】

いじめられっ子で吃音の少女が夏休みをさかいに成長してゆく。
普遍的テーマを切なく美しく描く純文学。

小さい頃地球は真ん丸と知り何故南半球の人は地球から落ちないのか、と不思議に思った事があった。

宇宙から見れば上も下も無く、地球上の物は何でも地球の引力によって地球に引きつけられているので落ちない。地球から離れないのだと知った。

あたしの視界に広がる風景は全て地面に引きつけられている。酸素、海、街、心遣い。それぞれが乱れないように生活を淡々と送っているのだ。引力によって。

・ ・ 不思議。

質量の大小によって引き合う力の大きさは変わるが、二つ物体には必ず引き合う力が発生するんだもんね。

磁石でなくても引き合うのだからとても不思議。

クラスメートの篠崎君が一枚の古地図を見せてくれた。

生徒達の帰ったがらんとした教室は夏色の夕日で染まっていた。

錆びた欠片を集めたような古地図はひどく優しい夢のようで、

あたしは人生で初めての目眩を覚えた。

小学校4年1学期の終業式の朝、あたしはいつものようにクラスメートにいじめられていた。教室に入るとあたしの机が教壇の隣りにあった。

皆の冷たい視線を避けながら、机を引きずり元の位置へもどす。戻す途中でデリカシーの欠片もない担任教師が入ってくる。

デリカシーの欠片もない担任が言う「おい、土屋。何やってんだ？」あたしは顔を上げられずにうつむいたまま「すっすっすっすいません。」そこで失笑がこだまする。

あたしは物心ついたときから吃音に悩まされ続けている。

顔が火照り、なのに血の気が引いてゆく。それでも何とか机を戻し、着席した。空気が濁る。こんな事、日常茶飯事だ。

いつからだろう、あたしは心を働かせることを辞めた。

窓側の席とも暫しお別れか。ま、でも明日から夏休みが始まる、自分ここへ通わなくていいんだ。何て事をグラウンドを見ながら何気なしに考えていた。デリカシーの欠片もない担任は、夏休みの連絡票の説明をしている。誰も聞いちゃいない。皆、明日からの予定に胸を躍らしている。

あたしは何の為に学校へ通っているのだろう。失笑される為？皆はあたしを道化師にしたいのか。いや、もうくだらない事を考えるのはよそう。あたしは明日から自由の身なんだ。

ホームルームも終わり、荷物を全て持って帰らなくてはいけないうちに教室後ろのロッカーへ行くと、大量のゴミがあたしのロッカーに捨てられていた。体操着やらと入り交じってあったので分別するのにかなり手間取ってしまう。体操着を丸めランドセルに押し込もうとした時、一枚の紙切れが体操着に挟まっていることに気付いた。キレイに四つ折りされた紙切れだった。静かに広げみると、それは手紙だった。

『土屋さんへ 話があるので夕方まで教室で待っていてほしい。』

篠崎

・・篠崎くん？話？えっ？驚いたあたしの鼓動はみるみるうちにスピードを増していった。あたしは何故か慌ててその手紙をスカートのポケットに入れた。

篠崎くんがどうしてあたしに話があるのだろうか。篠崎くんとは殆ど口を聞いた事がない。他のクラスメイトとも元々喋らないあたしだけど、篠崎くんは皆と何かが違う。人をいじめたりする様なタイプではなく、近寄り難い雰囲気の人間だ。転校してきて半年そこそこだからなのか、どこか冷たく淋しそうでもある。怖そうでもある。

そんな篠崎くんがあたしに何の用があるというのだろう。

あたしはランドセルを机の上に起き、席に座った。グラウンドに立つ銀杏の葉の小さな揺れを見つめながら、あたし自身も期待と不安に揺れていた。

ふと、思った。篠崎くんの指す夕方とは何時だろう。3時？4時？5時？今現在は正午。後どれくらい待てばいいのだろう。そんな事よりあたしは初めて他人から貰った手紙にドキドキしていた。窓からの景色、全てに意味があるように思え何処へでも飛べそうな予感さえしていた。

気付けば夕方4時半を回っていた。まだ篠崎くんの姿は見えない。やはりただのイタズラか？でも篠崎くんはそんな下らない事をする様なタイプではないし。

あたしは待った。ひたすら待ち続けた。お尻が痛くなり何度か席を立った。教室の端から端まで何歩あるか数えたりした。お腹は空かなかった。朝御飯も大して食べていなかったが空腹は感じなかった。

誰も居ない何もない教室は全てが眠っているようで太陽だけが少し眩しかった。小さな声で少し歌ってみた。出来るだけ小さく歌った。その時、廊下から足音が聞こえた。自分の世界にまみれていたので吃驚して一瞬、背筋が凍った。

足音が止まる。篠崎くんはあたしのすぐそばに居た。7時5分前だった。

「あ、遅くなつてごめん。」早口で篠崎くんは謝った。

「ちよつと用が長引いて・・・」

「うん。そつそれで、なっ何？」

篠崎くんは急いでやってきたらしく、静かに呼吸を整えてる。あたしは唾を飲んだ。予想以上にゴクリと大きな音が響き渡り、思わず息を止めた。

しばらく沈黙が続いた。どれくらい続いたのだろう。あたしの心臓

は真夏にも関わらずほぼ硬直状態で芯が冷えきっているようだった。陽に焼け果てたグラウンドの砂を背に寝そべりたかった。

「僕の伯父さんは政府の人なんだ、そしてお父さんは考古学者なんだ。」篠崎クンは言った。

「伯父さんとお父さんの内緒の話を聞いちゃったんだ。」篠崎クンは続ける。

「お父さんの研究論文にイギリス政府の都合の悪いことがあって、奈良にあるなにかの証拠をイギリス政府より先に見つけないとお父さんの命が狙われる可能性があったんだ。」篠崎クンは冷静に淡々と語っている。あたしは鳩が豆鉄砲を喰らった状態だ。

「で、その証拠を見つける為の地図を日本政府に渡したんだけど、お父さんはキーワードを教えなかった。イギリス政府もそれを解つてなくて、結局どちらも見つけれなかったんだ。」

篠崎クンの口調がとてもキレイな標準語なので、あたしは聞き惚れてしまった。去年初めて聴いたカーペンターズの歌声のようだった。酷くキレイで儂さをも感じた。

話の内容はあまり飲み込めなかった、と言うより理解し難かった。映画のようなストーリーだ。何だって？政府？証拠？イギリスってどこだっけ？

篠崎クンはランドセルから何かを取り出しながら続ける。

「この間、お父さんが僕に打ち明けてくれたんだよ、イギリスも日本も大人達は大切な何かを見失っているって。宝物とは自由な心なんだって。」

「もう危険はなくなったから、お前が探せってコレを貰ったんだ。」
「言いながら篠崎クンは、琥珀色の古地図をあたしに差し出した。」

墨で細部まで精巧に描き込まれたその地図は、おごそかなオーラを放っていた。かなり古い物であること、そしてそれはあたし達にいる奈良の地図である。

「これ、なつ奈良の地図やん！」あたしの口をついた言葉は、吃音奈良弁。自分を呪った。

「あんな、あたしの言葉、きつきつ聞き取りにくいやろ？ かつかつ関西弁やし。」胸が空回りしながら喋るせいか自分が思ってるより大きな声が出てしまう。この場から逃げ出したくなかった。

「そんなことどうでもいいよ。」篠崎クンは無表情に言いながらもその瞳からはこれ以上のない温かさが漏れていた。

「そう、この地図はここ奈良の地図さ。300年前のね。」

「天神山を中心に半径2kmの地図なんだ。この4km四方のどこかに答えがあるんだ。ヘンな風にとらないで欲しいんだけど、僕はその答えに招待されてる。誰だかわからないけど夢の中で確かに僕を呼び起こすんだ、奈良へ引越して来たその夜から。多分、手にした地図がハヤクコイって言ってるんだ。」

篠崎クンは真つすぐな眼差しで冷静に、完璧な口調で言う。

あたしは肩が強張った。まるで虚構の糸に縛られた操り人形のように。篠崎クンの完璧な口調、眼差し、それら全てがあたしの想像を遙かに超越している。あたしの心臓はそのエネルギーに押し倒され、トコトコと小刻みな脈を打っているようだ。

古地図を見つめ、ふと思いついた事を言ってみた。

「何でそんなことあたしに話すん？」あ、つまりに言えた。あたしの脳に住む小人達が歓喜の舞を魅せた。

篠崎クンは続ける、「忍耐力のある女の子がどうしても必要だった。お父さんに言われたんだ、忍耐力のある少女と探せって。」

目がすぼんだ気がした。

「土屋さん、いつもいじめられてるのに反抗もしなければ歯向かいもしないし、だから。」

そうか。いじめられてるからか。その上登校拒否はしないし、人前では泣いた事もない。反抗しないのは悪化を恐れてるからだ。いじめられてる人間にしかわからないだろう。忍耐力があるんじゃない、余裕なんてない。あたしは無力で弱い人間なんだ。

頭がつーんと熱くなつた。涙が溢れた。悲しいんじゃない。嬉しかった。ちゃんとあたしを見ていた人が居た。

しばらく涙が止まらなかった。雨のように溢れ、鼻水は滝のように流れた。あたしはハンカチを持っておらず、手で涙を拭い、懸命に鼻を吸った。恥ずかしい、これほど酷い姿はない。よりもよって男子の前で。

篠崎クンは何も言わず冷静に、ポケットからハンカチを出してくれたがあたしはそれを受け取れなかった。あたしには篠崎クンが眩しすぎた。

「ごつごめん、もう大丈夫。」鼻を鳴らしながら言った。

「そつそれで、あたしはどうすればいいん？につ、忍耐力はない方やと思うんだけど、。」考えてみれば、同い年の男子と普通に話すのは初めてだ。いささか緊張はしてるが、ちゃんと話してる。ごく自然に。それにとっても気分が良い。

「一緒に、探しに行こう。」篠崎クンはイメージ通りの口調で言った。

「う、うん。わかった。」先ほど意識したからなのか声が少し震えた。泣いたからなのか唾を飲み込んだら塩っぱかった。

夕日が滲んで篠崎クンの肩越しにあたしの未来が少しだけ見えそうな気がした。

宝物のように預かった古地図を抱え走って帰った。今日は大変な一

日だった。まだ頭が混乱している。直ぐさまお風呂へ入り湯槽に浸かる。心は高ぶり頭はボーッととして腑抜けになった手足は溶けそうだった。そのうち湯気で息苦しくなった。

勉強机の椅子に腰を下ろし扇風機を回す。カルピスを飲みひと息ついた。えっと、頭の中を整理しよう。手紙をもらって、夕方まで待つて、政府がどうのこうなので、不思議な地図を見て、あたしの忍耐力が必要で、一緒に答えを探しに行く、、、篠崎クンとあたしが、、、あたしと篠崎クンが、、、2人で。

駄目だ、混乱してる。どうしたっていうんだ。考えようとすればするほど混乱する。疲れた。細胞が疲れている。考えるのは明日だ。明日、考えればいい。

ベッドで横になると静寂と闇が素早くカンタンにあたしを覆った。その闇に溶けるように落ちていった。

目が覚めたら朝の7時だった。お腹が空いていた。お母さんが作ってくれたホットドックを2個も食べ、カルピスも2杯飲んだ。

部屋に戻って古地図を開いた。地元のそれも家の近所の地図である。越してきて半年あまりの篠崎クンよりあたしの方が何か読み取れるかもしれないということになったのだ。

ジッと目を凝らして答えを求めた。でも読み取れなかった。300年の前の地図なので細部が現在と殆ど変わっている。

ただ眺めてるだけでは答えの欠片は降ってきそうになかった。古地図に掌を滑らせてみる。この感触は和紙だ。それも上質な。しかし多くの人がこの古地図に触れたんだろう、所々がシワになり折れ目が入っている。あたしは古地図に文珍を幾度も這わせ、シワを伸ばした。そして勉強机に付いている電球で照らしてみた。何も無い。窓を開け放ち太陽の光で透かしてみた。何も出ない。集中して見つめる。やはり何も出ない。あたりまえか、政府でさえ何も読み取れなかったのだ。

この地図には必ず何かトリックが仕掛けてある筈だ。微々たる思考

を巡らす。そうだ、肉眼ではなくサングラスで見てもよいではないか。

台所に立つお母さんの目を盗み、電話横に雑然と置いてある車のキーを握り締めた。ちゃりん。キーホルダーが受話器に触れた。

「あ、理恵ちゃん、どこか行くの？」お母さんはシンクに突っ込んだ手を動かしながらこちらを見た。

「う、ううん。別に。」あたしは慌てて車のキーを背後に隠した。

お母さんは少し首をかしげたが、特に気にする様子はなかった。あたしは足音を立てぬよう慎重深く歩きガレージに止めてある車まで辿り着いた。恐々とキーを差し込んだ。勝手にこんな事するのは初めてだ。運転座席の上に付いてある日除けのようなものにサングラスは吊り下げてあった。素早く拝借し、ドアを閉めた。

急いで自分の部屋へ戻り、早速サングラスをかけて古地図を見つめる。5分、10分、。少しも変化はなく何も見つけれなかった。床に座りベッドに背をもたせかけた。少し不安になった。どうすれば良いんだろう。そもそもあたしなんかを読み取れるものなのか。

しばらく意気消沈していたが、お母さんの騒がしい声で我に返った。「理恵ちゃん、車の鍵がなくなったんやけど知らん？ちよつと来てー。」

げっ、やばい、。鍵、どうしたっけ。あぁっ！運転座席の上に置いたまま忘れてきた！どうしよう、バレルのは時間の問題だ。どう言い訳するべきか。兎に角、鍵を返さなければ。あたしは張り詰めた心でリビングへ行った。

「理恵ちゃん、さっき何してたん？」訝しげな面持でお母さんは言う。あたしは答えられずに居た。

「なあ、聞いてんの？」お母さんは急かす。

「ご、ごめん。くっ、車の中に忘れた。」

「どういうこと？」お母さんはオクターブ低い声で溜め息混じりに聞く。ヤバい状況だ。古地図の事は何とも言えるわけがない。

「んあっ、向かいの佳美ちゃん達と志村けんのだいじょうぶだあ

ごっこをやる約束でさ、あたしは田代まさしの役やから小道具にサングラスが欲しかつてんっ！せやから借りてんっ！」咄嗟の出鱈目な言い訳だった。

「そんならちゃんとお母さんに言うてから借りればいいやろ、車乗られへんやんか。合鍵もないねんで。お母さん仕事行かなあかんの。今日は夜勤やのに。」いやはやと言わんばかりにお母さんは呆れ果てた様子。（ちなみに土屋家ではお母さんしか車の運転をしないのだ。）

取り敢えずあたしはこの場から逃れる事ができた。思いの外、気の利いた言い訳だったかもしれない。しかし車の中に鍵を置き忘れたミスは反省だ。

お母さんは電話機の下に棚からタウンページを取り出した。車屋に電話するそうさ。

あたしは小さく頭を下げ謝り、自分の部屋へ戻った。そしてまた古地図を眺めた。

、、、そうさ、火で炙ってみるのはどうだろう。こないだ理科の実験でもそのような事をやった。だが火を使うとなると1人で試すのは少し危険。

あたしは篠崎クンに相談してみようと思った。昨日、電話番号を教わり手の甲に書いておいたんだ。左腕を持ち上げる。番号が半分薄れていた。一瞬焦ったが、よくよく見ると消えてるのは市外局番の方だった。

あたしは引き出しから小銭を取りスカートのポケットに入れ、公衆電話に向った。鼓動は高く鳴り響き、浮き足立っていた。

あたしは篠崎クンと秘密を共有しているんだ。これまであたしの中のどこかで停止していた歯車が動き出し始めているように感じた。足元にある道は果てしなくどこかへ続いている。こんなあたしでも歩けないはずはない。

公衆電話ボックスの扉を開けた。ここに入るのは人生で2度目だ。鍵っ子のあたしは1年前クラスメートにいじめられた時に首にぶら

下げた鍵を奪われて家に入れなくなった事があった。そして公衆電話でお母さんの仕事先に電話をしたのだ。

考えてみればあたしは鍵という存在で失敗する。鍵というものは何か閉ざしているものを除き通れるようにするものだ。あたしは自らの手で蓋をしていたのかもしれない。こじ開けようとせず心まで葬っていたのかもしれない。

受話器を手に取り、声を出して喋る練習を試みた。駄目だ。吃音パレードだ。土屋という名前も篠崎という名前もつまりやすい。

手足をバタつかせ30分近く練習していた。成果はあった。ジャンプしながら言うと比較的つまりまらず何回か言えたのだ。このテンションが落ちないうちに電話しよう。

ゆっくりボタンをプッシュする。手が小刻みに震える。受話器を持つ手は耳にぶつかるほど震えていた。

「はい、篠崎ですが。」

「つ、つ、つつつつ土屋ですがあ、しっつしっ、しいい、篠崎クン、いいいいん居ますかあ？」

緊張がピークに達し、電話ボックス内あるだけの面積で暴れまくりジャンプしながら言ったが出た言葉がこれだった。最悪だ。さっきの練習の成果が全く発揮されておらん。

「はい、少し待っててね。」女性があたしのさぞ聞き取りにくい声に全く動揺せず、冷静だった。やはり篠崎クンのお母さんだ。

そして電話口で、なおき―と篠崎クンを呼んでいる声が聞こえた。あたしは全身が火照り、恐らく目は泳いでいた。

「もしもし、土屋さん？」

「もつ、もつ、んつもおもしろい。つ、つ、つ、つ、つ、土。。。」

「会って話そうよ。4丁目にあるスーパーオークワわかるよね? 30分後にそこで。いい?」

「うっ、うくっ、くうん。」まるで犬だ。

そんなわけで人生二度目の公衆電話は惨敗してしまった。ふう、疲

れた。塞ぎ込んでいる場合じゃない。あたしは帰宅し、古地図をリュックサックに入れてお気に入りのＴシャツに着替えオークワを目指した。

篠崎クンが居た。学校以外で初めて会う私服姿の篠崎クンは少し大人びて見えた。

オークワの駐車場の端にあたし達は座り込み、今までの状況を一通り説明した。火で炙る作戦に篠崎クンも賛成してくれたのでオークワでライターとうまい棒（明太子味）２本を購入した。篠崎クンが全て支払ってくれた。

「どこで作戦決行しようか？火を使うから人目に付かない場所が良いね。」篠崎クンはあたしに問う。あたしは一瞬にして閃いた。

「あ、あたし、この近所に秘密基地あるねん。そこならまず人は来やんよ。」

そう、あたしの秘密基地。４年前の夏に見つけた場所。当時大阪から引越してきたばかりだったあたしは学校帰り探検がてら近所を散策した。通った事のない道をぶらぶらと歩いていると一面の荒野原に古びたマイクロバスがぼつんと佇んでいた。あたしはそのバスがとても気に入った。

共働きの親を持つあたしは誰も居ない家に帰るのが淋しかった。そして恐かった。誰も居ない片付いた部屋に居ると孤独感にひしひしと襲われ、よりあたしを独りぼつちにさせた。まるで世界から見放されたように。

そうして頻繁にそのバスへ足を運ぶようになった。いじめられ始めた時はそこで泣くことができた。そして温めてくれた。秘密基地。ある日、近所の公園に子猫が捨てられていた。物凄くなついてくる可愛い子猫をあたしは放って置けず家に連れて帰った。お母さんに隠して自分の部屋で飼っていたが、２日目にしてバレた。猫はずっと鳴いていた。公園ではなついていたのにどうしてだろうと思った。お母さんに元の場所に戻すと言われたが、そこへは行かず秘密基

地へ連れて行った。そこでも猫は脅え鳴いていた。2週間程はそのままバスで飼っていたが、いつの間にかいなくなってしまった。子猫の都合は考えていなかったのだ。

猫という動物は生まれ育った場所が自分の縄張りであり成長するに従い自分の足で行動範囲を広げて行く、という事を後になって知った時、心が痛んだ。だからあの子猫は脅えて鳴いていた。今も思い出すと涙が溢れ出る。

錆び付いたドアを開けると、篠崎クンは真つ先に運転席を陣取った。仕方なくあたしはすぐ横の補助席に座った。本当のあたしのお気に入りは最後部右座席なのだ。いつもその席から荒涼とした野原に沈む夕日を眺める。クラスメートの理不尽な要求や教師の心ない言葉の記憶を広々とした景色に吸い取ってもらっていたのだ。でも今日は違う。天から降ってきた急な命令に戸惑いながらも、胸の奥底から力が湧いてくる。まるで入道雲のようにぐんぐんと。あたしは必要とされてるんだ。その時、遠くの空で稲妻が光った。しばらく運転席の計器類を触っていた篠崎クンは踵を返し本題へ入る。

「いきなり直火で炙るのは危険じゃないかな？燃えないくらいの微妙な熱さじゃないと、。フライパンとかあるといいんだけどなあ。」

「あつあるで。中華なあ、鍋やけど。」あたしがここを見つける前に誰かが住んでいたのだろう。あたしはバスの外側にある扉に篠崎クンを案内した。篠崎クンは中華鍋とキャンプ用の五徳を持ちながら「完璧！！土屋さんすごい。あとは薪だね。」と喜んでいる。

「そつそつそれもあつあるで。」薪ではないが、壊れた窓を直そうと思い、バスの下にベニア板や角材の切れ端を集めてあつたのだ。あたし達2人はまるでキャンプのように焚き火を熾した。火事になるといけないので、消化器も用意した。もつともゴミ捨て場から拾ってきた物だから、使えるかどうかかわからないけど。

中華鍋は丁度いい火加減になった。火が移るといけないので、薪の数を減らした。あたしは地図の両端を持ち、フワリと中華鍋に落とした。高鳴る胸の鼓動を抑えながら、地図の細部まで注視した。篠崎クンは銀色の腕時計を左手に持ち、時間をはかる。

まだ変化は無い。永遠にも思える時間。もうまずいか？あと少し。

ぎりぎりの判断を迫られる。ピカッ！その時だった。突然の霹靂と共に大粒の雨が滝のように降り出した。熱せられた中華鍋に雨粒が落ちギョングョンと音をたてる。モウモウと水蒸気が立ち上がる。あっという間の出来事で、腕がすくんで地図を取り上げられない。どうしよう！

篠崎クンが被っていたキャップ帽をミトンのように使い、地図を引き上げた。そのままバスへ走り込んで行った。あたしも後を追う。真夏のスコール。突然の出来事にお互い言葉をなくした。

地図は無事だった。相当、頑丈な和紙なのだろう。思った変化はなかった。ので火炙り作戦も失敗に終わったようだった。

あたし達は無言のまま席に座る。フロントガラスに激しくぶつかる雨をただボーッと眺めていた。去年の夏休みも雨の日にここにいたことを思い出した。クラスメートの誕生日を祝うと称したあたしをいじめる会で散々いじめられた帰りにバスに逃げ込んだのだった。浴びせられた罵声や迫害を夕闇に吸い取ってもらったのだ。でも今日の出来事でそんな記憶も過去になりつつある。

「あれーっ？なんだこれ。」篠崎クンは裏返ったひょうきんな声を上げた。

「見てみて！！これ見て！ほら、ここんどこ。」大声を出しながら地図の裏面を指差した。

「どこどこ？あっ！なんやのーこれ。」地図の裏面の数力所に盲人用図書みたいなポツポツができている。とても不自然に。

「濡れたからだ。というより蒸したから、だね。」キラキラと瞳を輝かせて篠崎クンは言った。

「そっそやね、こっこれがトリックやったんかな？でも、なっ何を示してるのかようわからんなあ。」二人は顔を見合わせた。

「でももうちよつと蒸したらまだ何か出るかも。どうしよう、蒸気か、。あっ、そうだ！スチームアイロンだ！」篠崎クンは自問自答して答えをだした。

「あっあん雨止んだら、あーたしん家来いへん？おっおっ母さん今

夜やや夜勤やーやんねん。」「言いたい思いが強いため、こんな
になってしまった。頑張れ、あたし。

「うん、じゃあ雨が止んだら土屋さんに行こうよ。」篠崎クンは
やさしく微笑んだ。幾分か救われた。

男子を自宅に招くのも無論初めてだ。

あたしの家はごく普通の小さな一軒家だ。築20年なので外観が諸
一昔前のセンスで見た目は良い方ではない。部屋はキッチンと掃除し
てるので不潔ではないが何よりインテリアのセンスが悪い。裕福で
はないので貰い物や中古で購入した家具を、センスの一欠片もない
お母さんがレイアウトしてるだけ。それらを見られるのが少し恥ず
かしかったが、篠崎クンは微塵も興味のない様子だった。
2階のあたしの部屋に招いた。

「どつどつどこでも、いいいいいから座ってって、アイロン取
つてくるわ！あつ、のっ喉、乾いたな、カルピス飲む？」

篠崎クンは女の子の部屋に入った事があるのだろうか。特に緊張し
てる様子もない。あたし1人が焦って空回りしている。自分の空間
に他人が入ると調子狂うもんなんだなあ。あたしはそんな具合に目
的とは関係のない事を思案し、押入れからアイロンとアイロン台を
取り出した。

するとアイロン台の柄があまりにもみつともない上にここかしこ破
れ、変色もしていた。アイロン台の代わりに座布団を代用する事に
した。

部屋に戻り篠崎クンにカルピスを手渡した。

「お腹空いたからコレ食べよう。」とオークワで買ったうまい棒を
篠崎クンは差し出した。

お互い無言で食べた。ムシャムシャというあたしがあらゆる音の中
で一番嫌いな音だけがここにあった。

「さて、始めようか。」

「うっうん。」

スチームアイロンには水が入っていたのでそのままコンセントに挿した。温まるまでの暫しの沈黙にいたたまれずその辺に落ちてあつたジョンデンバーのアルバムを団扇代わりに汗が滲む額を煽いでいた。

ランプが消えた。準備完了だ。あたしはアイロンを手にした。

「押し付けないでね。」篠崎クンは心配そうな目であたしを見た。

「わーかつてる。毛糸のセーターの要領やな。」鍵っ子のあたしは家事が得意なのだ。

アイロンを水平にするとシューシューと勢いよく蒸気が出る。それをそのまま地図に近づける。

「ポチポチが並んでる真ん中の辺りからお願い。」と篠崎クン。あたしは小さな円を描くように蒸気をあてた。

「………もっもういいかな？」

「うん。」

「………。」

「………でた！中央のポチポチは見事に鳥居のマークになっていた。」

「やったあー！！」2人は嬉しさのあまりハイタッチを交わした。あたしは興奮して肩を揺らし右手小指がアイロンに当たった。たまらなく痛くて熱かったが我慢した。これも忍耐力の筈。

「こっこの記号って、、神社やんなあ。」あたしはゆっくりと呼吸を吐き出しながら言う。

「うん、そうだね、、。でももう少しやってみない？もしかしたらまた何かが出るかも。」篠崎クンは眉間にシワを寄せながら鳥居マークに見入る。

あたしはもう一度蒸気をあてた。慎重に丁寧に、地図全体を蒸気で埋め尽くした。蟻の巣ひとつひとつを取り調べるように。

でた、、。地図上の鳥居マークから10センチ程離れた左上に奇妙なポツポツが、、。

「なんだろうこれ？」

「うーん。このマークようわからんなあ。」あたしは両手を伸ばし古地図を天井に向けた。さっきの火傷がヒリヒリと小刻みに皮膚を刺して痛い。そして古地図を裏返し照明に透かした。

「あつっ！このボツボツ、アルファベットの'G'になってる！」

「ほんとだ！！土屋さんすごいじゃん。」篠崎クンに褒められた。嬉しい。

「せ、せやけど、G'ってどっどーゆう意味やろ。300年前の日本の地図やのにアルファベットってヘンやなあ。江戸時代やろ。」首を傾げる。江戸時代といえば浮世絵の暑苦しい画像しか思い浮かばない。浮世絵はどうしてドロドロとおどろおどろしい感じのものはかりなんだろう。

「兎に角、この記号が現代の地図上のどこにあるか確かめないと。高田の図書館に住宅地図の本ってあるよね。」

あたし達は明日、図書館に一緒に行く約束を交わした。

篠崎クンは礼儀正しく「お邪魔しました。」とあたしに頭を下げ、帰って行った。

しんと静まり返った部屋は篠崎クンの匂いだけが残っていた。その香りは独りぼっちの空間にそっと魔法をかけ優しくあたしを温めてくれた。

ひとつも怖くない初めての夜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5890d/>

G

2010年10月8日16時11分発行